

淨土教の往生に連なる最も客觀的な世界の眞理に於て證される行信が現成した。(昭和三十四年十一月二十一日)

## 『遊心安樂道』元曉作説への疑問

村地 哲明

『遊心安樂道』は古い時代の諸種の目録には見當らず、法然上人の『選擇集』(本、二左)及び『逆修説法』(法然上人全集、卷二七二頁)に、

「元曉、遊心安樂道云。」

と記述せられて、本著を元曉の述作に歸せられてゐる事實を知るので、このような法然上人の記載に基いて考察するとき、本書の製作者が元曉に歸せられてゐる史實の相當に古いことは想像されよう。そして古來から、かような元曉作説を疑つた學説は見當らないように思われる。しかし、富貴原章信師がすでに發表された處の高仙寺哲幢塔碑によると、元曉は垂拱二年(六八〇)三月三十日に七十歳で入寂してゐるから、かかる元曉の遺著に、神龍三年(七〇七元曉歿)に菩提流志が翻譯した『不空羼索神變眞言經』(開元錄第九卷、結四・八二右)を引用したり、又、同三藏が神龍二年(七〇六)から譯出して先天二年(七二七元曉歿)に終つたという『大寶積經』(開元錄第九卷、結四・八二左)をも引用することなどは、本書を元曉作とする説に疑問をなげかけさせずにはおかない結果となる。又更に、これらの二經典を後人の加筆であると假定してみたとしても、本書では元曉の後輩たる懷感(六九五)の『群疑論』の九品生位章の敍説が、明らかに依用されておる事實から考えて見ても、古來からの元曉作説は疑わざるをえぬのである。

所で、かかる疑問を解決するために試みに本書の内容を檢討してみると、『遊心安樂道』では、まず元曉の著作である『兩卷無量壽經宗要』の大部分を、六回に互つてそのまま轉載してゐるという事實を知る。つぎに、迦才『淨土論』と『遊心安樂道』との關係を眺めてみると、この事柄に關しては知俊以來すでにふれられ、名畑應順師の『迦才淨土論の研究』では詳細に述べられてゐる。而して私の研究によると、『遊心安樂道』では迦才の『淨土論』文を九回に互つて用いてゐる事實を知るのである。このように『遊心安樂道』ではその構成されてゐる大部分が、元曉の『大經宗要』と迦才『淨土論』との轉用に過ぎなく、しかもここに注意を惹くことは、元曉と迦才との二師が釋せる『彌勒發問經』の十念義の解説を記載して、かかる兩師説の中、元曉説を否定する立場に導いてゐる事實は、本書が元曉の著作でないことをおのずから顯わしてゐる證左であるように思われる。

なお、先天二年(七二七)譯の『大寶積經』を引用する事實は、本書が開元元年(七一三)以後の述作であることを示唆する。又、卷末の『不空羼索神變眞言經』の引用は、密教の密呪によつて西方の往生を説く思想、及び眞言の密呪によつて亡者の靈を供養する思想などは、善無畏が開元四年に入朝してから密教が隆盛に向い、以てかかる密教と從來の念佛とが雙修せられたことを示す資料であると共に、本書の著作もその頃の時代になるのではないかと思われる。更に、本書が元曉作に歸せられたことについては、元曉の『大經宗要』の文を最も多く依用していることと、密教的民俗的信仰を權威づけようとする企圖から出たも

のではないかと考えられるが、いかがであらう。

註① 富貴原章信師論文「攝論宗の日本傳來に就て」〔大谷學報〕第二十一卷第二號(六八—六九頁)。

② 『群疑論』第六「九品生位章」(『淨土六・八六頁上段九行)に、「一釋此九品…麤分ニ九品也」と説き示される文を、『遊心安樂道』(『淨土六・一六頁上段七行)ではそのまま依用されている。

### 蓮師の後生の一大事について

山元良信

蓮師一代の發揮は「後生助け給へ」「後生の一大事」であるとせられ、今稻葉昌丸師編「蓮如上人遺文」並に「行事」によつて見れば第一に後生の語は今生に對して用いられ現世後世の義であり今生のいのり即ち諸神諸佛に對する現世祈禱を排し後生たる淨土往生をねがわしめておる。

第二に後生菩提の成語によつて「今度の極樂往生」の意味を表し「後生のための念佛」「ねがうべきは後生」「後生は永生の樂果」「後生は空しく無間地獄におつる」「われらがちからにては後生のたすかるべきなし」「彌陀如來をたのみたてまつらんひとならでは後生はたすかるべからず」等、後生の苦樂は如來をたのみかたのまぬかによつて決定する點を示される。

第三に「後生助け給へ」は善導の六字釋の南無歸命の二字の解釋として彌陀をたのみころを念持の義によつて示され機法一體の衆生往生の體が南無阿彌陀佛である事が示される。

第四に「後生の一大事」は、今度の極樂往生の一大事の意であつて「後生善所の一大事」「今度の一大事」「今度の往生」「今度の一大事の往生」「一大事の後生たすけたまえ」「一大事と思いとり」「今度の一大事の報土往生」等との成語によつて後生こそ一大事であつて我々が報土往生を遂げるか否かは佛教上からも亦人間一生涯からも最も重要である事を警告せられたのである。

以上の如く蓮師時代の無常觀末法思想の深刻な時代に適合して、民衆の要望に答へたる時機相應の教化として「後生の一大事」は意義があつた。

併し現代に於てはこの「後生の一大事」をいかに受取つて行けば現代人の救いとなるであろうか。蓮師に於ては世俗諦の立場よりして三世思想が説かれたのであるが、現代に於ては勝義諦の立場から三世が説かれて現代人の救いとなるのではなからうか。

部派佛教の上座部は、三世實有の思想で客觀的に三世法を眺め、大衆部は法體恆有の思想が否定せられて過去未來は現在に對する相對的名稱として現在法も亦一刹那にすぎぬのであつて現在の一切法は主觀によつて統一されたもので客觀的にはあり得ないとするが、更にこれを龍樹は「中論」觀去來品に於て一層高められて勝義諦の立場に於て三世の自性は無自性であるから不可得であるとして、三世の實有を否定しておる。かかる點よりして現在法も觀念であり非實有であるが、今を境として主觀的には前後が區別せられて過去未來が考へられる時「後生の一大事」は今から後の死後に到る、「永遠の期間の救濟の一大